

(186)

軍の命を受けて御迎ひの者共参りましたと告げる。朝餉の仕度もそこへに驛外に出づれば、曉の風に嘶く二十頭餘りの駿馬鬣を振つて待つて居る。一行はやがて馬上の人となり、十餘騎の來迎者を従へて進むこと十町許り、忽ち一帯の高邱の上に五六十騎餘りの兵員が並列してのが見えた。何れも銃を斜めに背負ひ、左列なるは黃龍旗を垂直に押し立て、右列なるは三角にヒダを附したる旗の中に、蒙古字にて三四行縫ひ取したるものを押し立て、肌涼しき滿洲の朝風に颯々と翻るさま勇壯たとへん方もない有様である。是れ附屬地には武装者の入るを禁せる爲め、此所に於て予等一行を待ち受て居たよしである。一行の通るや、皆旗を正面に捧げて敬意を表し、左右に圍んで護衛しつゝ前進する、中に頭目らしき者がブー〜と勇しく貝を吹き鳴らす。すると突如として後より二三騎飛鳥の如く駆け出す者がある。而して一面に繁茂せる高粱畑の中を縦横に駆け廻り、暫くして數十歩前に馬を止め、高く右手を舉げる、是れ此附近には支那兵の屯在する所あるを以て、狙撃者等の

虞を慮り偵察せしめ、其の安全なるを見て右手を高く舉げて合圖をするのである。かゝる行動を繰り返すこと數十回、進むこと里許、前面より輕騎五六の迎へ來るを見た。中に綠色の長衫を着け、海老茶色に丸の龍紋ある羽織を穿ち、金絲の縫模様ある蒙古式の帽子を戴ける頑丈なる四五六の偉丈夫が居た。是れ即ち巴布札布將軍である。逞しき骨格、淺黒き面貌、怒れば三軍を嚮伏せしむべき面影に、微笑を湛へて予等を迎ふるの溫容、赤子も懐くべき様子が見えた。

轡を並べて將軍の本營に達した。楊柳繁る小高き岡の蔭に、六尺四方あるかなしのテントが張られてある。是れが將軍の本營である。宿舍である。三千の勇士の死命を制すべき司令部である。テントは到底二人足を延べて横臥することの出來ない位に狭い。坐しても四人と容るゝことは窮屈である。風外先生と予と將軍は小さい卓を圍んで坐した。卓上には心盡しの支那菓子二三種と、しなびたる林檎が載せられてある。蠅は黒く成つて群つて來る。缺けたる土瓶に鉢力の茶椀、敷けるアンベ

(187)

(188)

ラを通して土の濕りが冷や〜と脚腰に沁み渡る。將軍莞爾として予等遠來の勞を謝し、『露營の地、何等の御もてなしも出來ず、慚愧至極である、唯だ不肖三千の子弟を率ゐて長驅此地まで來れる眞意を酌み給はれ』と悵然として頭を垂れる。『往昔蒙古全盛の時は、亞細亞の大半を攻略せしのみならず、遠く歐洲までも席捲せしものも、今は萎憊して振はず、唯だ四圍の壓迫を受くるのみ。名は支那の領土と云ふも、其の實治外の民である。支那の軍隊巡警の駐劄するものあるが、彼等は官權の威を藉りて強盜掠奪を行ふ土匪以上の惡徒である。往いて露西亞の力を借らんとする者もないではないが、祖先以來信仰する宗教に對して面目なきを奈何せん』と云ひつゝ將軍は胸に掲げたる佛像を出して示す。將軍語を次いで『幸に、貴國は佛教の眞髓を傳へられて居り、仁義の國、武勇の國として吾等同胞の欽仰措く能はざる國である。爲めに會つて聊か微力を致したこともある。今日一死を賭して此地に來れるは、實に貴國の力に頼つて蒙古百萬蒼生の生命財産の安固を得、廷いては滿蒙

を獨立せしめ、清朝を復興して、三百年間我等に善政を布ける愛親覺羅氏の恩顧に酬めんが爲めである。希くは貴下等不肖微衷の存する所を憐察して、一臂の力を添へられんことを』と、一語は一語より切に遂に双涙の潜々たるを見るに及んでは神州俠國の男兒、腸九廻せざらんとするも得んやである。

將軍と堅き〜握手を交換せる予等一行は、將軍の軍隊を巡閱すべく再び馬上の人となつた。勇ましき貝の音の響きに連れ、何處よりともなく集り來る一中隊、一大隊、馬の傍によるよと見ればヒラリと許りに飛び乗りて、馳驅縱横、横隊縦隊千變萬化の妙を示すこと目にも止まらぬ位の働きである。各隊巡視中其の舍營地らしきもの見當らざるより、これを質せば、傍らの三角形に束ねたる高粱の幹を指して是が兵營であると云ふには驚いた。聞けば突泉縣の激戦に殆んど彈藥を空乏せしより、兎に角我鐵道沿線まで突進するを急務として、テント寢具の全部を焼き盡し、着のみ着のまゝにて郭家店まで急行し、民家を累すを憂ひて、高粱を束ねて其の中

(189)

に起臥して居ると云ふを聞くに至つては、其の困苦缺乏に堪ふること到底我兵などの及ぶ所にうらるるを感じた。斯くの如くなればこそ、成吉思汗の長驅歐洲を席捲せしことも會得せらるゝ次第である。予等巡閲の中、一小兒の馬を驅つて傍を馳驅する者がある、モーゼル大形のピストルを背負ひ、武者振り甚だ勇ましい。呼び寄せて其の年齢を問へば、僅に十歳といふ、而かもハルハ以來幾多の戰場に於て功名を現せる者と案内者は語る。又た或る部隊に於ては、白髯胸に垂るゝ老翁も居た。六十二歳、軍中の最高齡にして日本の乃木將軍の異名を有する老功者の由である。

嗚呼、幼は十歳より、老は六十二歳に至る三千の勇士、皆巴將軍の命を奉じ長驅萬里、一に某國を頼り約を履んで滿洲に躍進して來たのである。唯だ某國官憲の措置宜しきを得ざりし爲め、空しく苦境に陥らしめ、遂に巴將軍をして陣歿せしめしが如きことあるに及んでは、我が大陸經營の基礎半ば破壊せりと云ふも不可なるべく、是れでは國家百年の大計も、日支親善の根柢も、東亞勃興の雄策も、何も

あつたものでない、支那人の所謂叢爾たる三島の中に、政權爭奪の爲めに維れ日も足らずに騒いで居ればよいのであらう。歐洲戦後の結末が東亞の大陸に殺到し來るのが分らぬのか、蒙匪の頭目が死んだゲナ、蒙古のチャブ〜とは何の事だいなどと云うて居る。政治家、政論家、新聞記者が威張つて行ける間は天下は泰平だらうよ、噫。

## 鐵 騎 行

鐵騎來 鐵騎來 三千鐵騎大漠來 萬里黃塵白馬躍  
三尺長劍重然諾 晨越興安巔 夕衝突泉縣

敵將倒兮城兵潰 數萬敵軍遂粉碎 健兒一笑又揚鞭  
長驅直入郭家塞 鐵騎有人巴將軍 慷慨守節望風雲  
十年養得大鵬翼 欲結東方君子國 東方豪傑皆奮起  
誓爲將軍同生死 難奈廟堂策未決 首鼠顧盼大勢徙  
由來長袖不足談 興亞大業天亦曇 將軍飲淚獨扼腕  
鐵騎據鞍空長歎 嗚呼鐵騎去鐵騎去 三千鐵騎歸何  
處馬蹄唯留千歲思 秋風落日草離離

沖つ白波

生は易くして難く、死も難くして易し。生死の境を解脱して極樂がよひの道ありとかや。觀じ來れば皆夢、觀せざるも亦夢と、悟り顔して唸り出す抹香臭き坊さんも本を正せば野山のすすき、末は尾花の露の身の、兎角浮世は三ぶん、五りん、うまくまるめる鼻糞丸、さくもきかぬも信心がらよ、鯛の頭も役に立ち、棚の牡丹餅ひとりで落る、運も不運も時世と時節、人間萬事塞翁の、むまい事なら中々にいかぬ畢玉越中の、ふんどし何時も向ふから外るゝものと聞きながら、やれ己れ徒手王侯は今なりと、天か下しる皐月やみ、雲を霞と飛び出して、八重のしほ路の船枕、行くへしら波海原の、中にたゞよふこの様は、天を怨むる事もなく人を咎むるよしもなし。寢言たはこと出まかせに、口ずさみたる言の葉は、根なし草とも笑ひ草、花も咲かねば實もならず、思ひでるきのしをりとも、ならば此上なき男、獨り涙をたゝ

(174)

ゆべし。

片

■

(庚子の秋淡水川のほとりにて記す)

六月十三日發札幌途中車上口占

あれよく藻岩の山は葉かくれて

汽車すゝむなり友偲ばるゝ

石狩の川邊の柳糸たれて

魚釣るらしも里のうなる等

革命加擔の發程口占

虎は吼え龍嘯きて諸越の

雲騒ぐらし風すさぶらし

(195)

狂と呼ばれ痴と笑はれて待ちわびし

徒手王侯の時來りけり」

いざゝらば七寸の筆擲ちて

三尺の劔われ帯ばむかも」

虎搏ちて其皮剝がむ龍屠り

顯の玉をわれ取らんかな」

諸越の荒野のいばら切り開き

わが日の本の櫻植ゑなむ」

沖つ白浪

片鱗

廿三日門司を發し船首南清を指す

青嵐吹くや海原三千里

時は今船は追風臯月晴

瓜茄子いま花盛り四百州

望臺灣翠巒干水天一髮之間

新高の山し知らねば白雲の

たなびく方をそれとしも思へ

於 廣 東

わが宿の軒場にすたく虫の音は

月まつ我の友としも見る

## 將探虎穴有感

天柱折。地軸裂。東海怒濤羶血漲。五色石。鼈之足。誰修四維追古轍。君不見崑崙山。高壓斗牛。洞庭水深鯤龍游。月清楓江寒山寺。露冷銅盤一滴秋。長城偉略連八垠。萬里雄風衣可振。運鑿妙智削天角。滔々大江足可濯。形勝如此亦何爲。江山依然天命移。漢之民。滿之族。粉爭何事互割肉。鵝蚌疲。漁夫窺。碧眼虜騎馬蹄速。君不見蘇郎堅節北狄惶。班超雄圖定西羌。天山草木瘴江水。威嚇四夷漢武揚。或爲絕代忽比烈。霸氣欲吞五大州。或爲乾隆勇敢決。興安山頭擴帝猷。讀史空見古傑迹。如今何人割奇策。嗚呼東方男兒膽氣雄。隻手欲收回瀾功。元是同文唇齒誼。忍見夷蠻逞縱恣。獨橫長劍磨鋒鏖。來結古越南方強。南方豪傑氣鬱勃。慷慨把臂棘毛髮。茫茫山河四百州。蠢爾蒼生四億萬。民可救兮國可建。新亭何敢泣杞憂。成敗是天君休論。好披赤心照乾坤。秋高中原鐵馬躍。涼風吹面入帷幕。我起欲舞君須歌。明月今宵先共酌。

沖つ白浪

(198)

片 鱗

仲秋有感

生不願兮死不願。生死畢竟懦夫論。此軀好有斃沙場。豈無氣魄輝八荒。身犯瘴霧惱  
邪熱。心存回瀾愈凜烈。瘦臂撫來淚欲吞。寶刀拭去睨血痕。今夜仲秋感何竭。影冷  
零汀洋裏月。

寄歸國中之一友

誓ひてしその言の葉も仇波に

もしほたきつゝ君思ふかな

病みはてし腕折るゝもいかにして

虎うつこゝろたわみやはする

風すさび雲たち騒ぎ徒らに

零汀洋裏月かたぶきぬ

(199)

九月十八日夜偶感

生爲不孝兒。

死爲不祀鬼。

踏地又跼天。

唯有大道燁。

寄灣仔豪遊之諸子

朧月夜にほふかぶり、ひら袖ゆかたの伊達もよう、そゝろ涼しき夕風に、ほろ酔  
さげんのふらくくと、足も千鳥の濱つたひ、灣仔かよひの程のよさかね。

訣別諸友

はや秋風の立ちそめて、夢驚かす昨日けふ、慣れにし旅もさすがには、空行く雁  
を眺むなり。孤劍飄然三千里、義を金鐵に誓ひつゝ、西は虎狼の牙を折り、東新た  
に建國の、壯圖を成さん心にて、來りし友は十餘人、謀議をこらす南越の、志士は  
所謂天下強國の衰運憤り、皆裂けて髪は堅ち、一呼三萬我軍の、兵を集まる唾手

沖つ白浪



の間、いざ諸共に兩廣を、となへて我の根を固め、湖北湖南に打ち入らば、天下岌然事成ると、白雲山の夕まぐれ、廣東城を瞰みつゝ、急水門の朝まだき、劍横へ筑を打ち、計りし事もあだ波に、散りて珠江の水の泡、行くへも知れずしら雲の、いづくを指して迷ふらん。

同志四方に離散して、残りし者は唯五人、こゝろ矢竹にはやれども、かへす方なや荒波の、うづまき來る勢を、腕さすりて眺むれば、九龍山の峰高み、虎門の寒水深し。さは云へあはれ日の本の、ますら武夫の行く道は、たゞ一筋のほかあらじ、義により進む野山には、草むす屍なんのその、道の爲めとてこぎ行かば、水くかばねも何のその、たとひ此身は朽つるとも、誰れかは植ゑむ櫻木の、世に香ばしく咲き出で、大和心の燦耀と、光を放つ時あらん、龍田の川にちる紅葉、錦織りなす頃は今、天つかりがねこゝろして、この一言を傳へてよ、都にのこる我友や、故郷にのみます我母は、如何なる夢をか結ぶらん、嗚呼いかなる夢をか結ぶらん。

## 漫 吟

こそ鞅鞅の雪に泣き、今瘴烟の地に迷ふ、世はうたかたの旅枕、十歳このかた誓ひてし、萬里建國いたづらに、零汀洋の波あらく、寄るべなきさの捨小舟、いづくともなく漂はむ、むら雲さわぐ風のまに〜。

## 新 高 山

高砂の、島根かためて、幾千世の、年ふりにけんしら雲の、深くとざしてかくれにし、山かけまくも大君の、御稜威蒙りこゝに今、名も新高の峰高み、晴れ渡りにし天の原、ふりさけ見れば鱒のすむ、マニラの沖や虎の臥す、シヤムロの野邊や諸越の、江のみんなみ十二省、うなじり延べてもろ共に、その新高の山おろし、いまこそ吹けと祈るらし、吹けよ山風こゝろよく、海原越えて山越えて、しこ草しげる西のはてまで。

一葦の淡水

扁舟一葦飄然と、

夢より淡き淡水の、清き流を漕き行けば、

風になびける青柳は、緑の髪を櫛り、吾を迎ふる風情あり。

汀にしげる蘆葦は、細き聲をばそろへつゝ、吾に聞けよと歌ふなり。

遠近の村より立のぼる、烟はやがて白雲と、みどりの空に浮ぶなり。

木の間を漏るゝ藁棟は、桃源洞の面影か。

牛に跨る童等は、薬を採るの仙なるか。

森のこなたの白壁赤瓦、ハクヘキセキグワ山に建てそふ高樓大厦、龍宮殿にあらぬかや。

波にたゞよふ水鳥は、去りもしやらす立ちもせず、吾を誘ふものゝ如。

水面に映る兩岸の、山さながらに繪の如く、舟は錦の上を行く。

一竿の竹横へば、吾大公を想ふ哉。

あはれ二首

谷間の梅

奥山の、山又山の其奥の、深き谷間の巖陰に、苔のつゞれを身にまとひ、雪のし

沖つ白波

三盃の酒傾けば、吾は東坡に似たる哉。  
浩然として歌ふ時、天地動き。  
悠然として坐する時、山河静かなり。  
嗚呼吾れ塵世の人ならじ。

陣中夜雨

矢叫びの聲と聞きしは夢なれや

芭蕉葉くたく夜半のむら雨

とねを踏みしだき、凜々しく立てる一本の、梅の梢にやさしくも、薫りて咲ける花  
 一輪、はかなく散らん風情なり。あはれ樵夫の路もなく、浮世の風も吹かばこそ、  
 霜にせめられ雪に泣き、吹く木枯しに枝は折れ、今や枯るゝと思ひつゝ、耐へ忍び  
 し甲斐ありて、僅に咲けるその時は、友とし呼びて尋ねきし、菽鶯の拙くも、初音  
 もらして慰めき、それも昨日の夢なれや、けふは麓に捕へられ、翅かひなく籠の中。  
 見るも冷たき心もて、苦しめたりし雪霜は、とけて流れて洋々と、浮世を渡り行く  
 と聞く、春の光の暖き、恵みもこゝは永からじ、清き心の月影も、常にうき雲さま  
 たぐる。ひとり散らなむいたづらに、空しく枯れむこのまゝに、谷間に咲けるこの  
 花あはれ。

## 貧家の菊

山里の、賤か伏屋の菊の花。

誰れも眺めず手折りせず、親子みたりのそのほかは。

乙女が野邊の行きもどり、水をやりつゝふり直す、その時菊はゆらくと、うれし  
 きそぶり見ゆるめり。  
 咲きしその花はゝるみて、乙女のかざしとなるもあり、煤にふるびし佛壇にゆかし  
 く薫ることもあり。  
 富める長者の奥庭の、花壇にすがたつくりつゝ、媚をさゝぐる菊さへも、ありと聞  
 きつゝ唯獨り、いとも楽しく咲きにけり。  
 あはれ浮世はこゝも亦、乙女はやがて嫁入りぬ、翁オキナオウナは年よりぬ。千々に亂れて其  
 菊は、風にかなしみ霜に泣き、世は秋過ぎて冬枯れの、月は枯葉コハを照してあはれ。

## 於洛東鴨涯龜屋

から山の旅ねの汗を洗はなむ

この鴨川の清きゆあみに

○ 玉敷の廟宇ゆかしき甯化オキテの

いにし昔の盛りをぞ思ふ」

○ 時雨ふる藜枝の森はおぼろろにて

一葉の扁舟閩江を下る」

○ 兩岸の藜枝の森をつなぎつゝ

洪山大橋虹の如く立つ」

### まぼろしの記 (上)

常夏の國とは云へ、離れ小島の冬景色、淋しさ添ふる獨寢の、夢覺勝なる焼腹に、儘よ三升樽横チヨに引寄せ、ガブリ〜とやらかす中に、遂うと〜と肘枕、前後も知らず寢込みしが、

フト枕上に聲あつて「ヤヨ汝、飲み助の寢坊なれど、日頃の信心殊勝により、暫しの間我通力を貸し與へん」と、呼ばれしに、アハヤと計り起きあがれば、こはそも如何に、窓にさし込む春日の麗かさ、世はいつの間にもやら陽春の好時節と變り、今を盛りと咲き亂るゝ百花の装ひ、そよ吹く東風に送られて、えならぬ薫りのゆかしさに浮れて胡蝶の舞ふや翩々、「ヤア面白いぞ」と立上れば、フワリ〜と空中飛行の妙力を感得したる奇代の不可思議、ウム「之ある哉〜、捨つる神ありや助くる神、貧乏の神より知らないみの作、今年今日、如何なる果報でかゝる御神に出遇ひ

しか。さらば御遠慮なしに暫く通力御拜借」と默禮しつゝ、そろり〜と浮れ出でぬ、  
那れを夫れと目あてはなけれど昔なじみの縁りもあれば、先づ廣東香港へと志しぬ。  
廣東香港は往年一味徒黨の者共と、棚の牡丹餅をひと掴みにせんとした所、今や  
通力自在の仙人然と構へ居れど、俗臭野心五體に満ちたるみの作、いかでか依然た  
る風光に對して、胸糞を害せざるを得んや。

劍執つて我とも起ちし九龍の

山いたづらに春の草萌ゆ

筑うちて益荒雄五人よざりてし

急水の瀬戸今も波たつ

我れ取つて代るべかりし廣東の

城巍々として春立ちぬらし

など、ヌタくれど、何の役にも立つべくもあらず、不如舊知の美人を尋ねて再び温

情に接せんにはと洒蛙〜乎として音なへば、「オヤまあ、御久振り何所に今迄うる  
ついて居ましたか、御約束の天下はどうなりましたか、貴客が天下を取らないも  
んだから、妾共もまだこんな所に愚痴〜してゐるんですよ、一體全體貴客の天下は何  
時取れるんですか、モウ何度位生れ代つたら宜いんでしょう、オホ、〜」と冷罵  
の一槍、首尾よく急所を衝かれたり、されどみの作、平氣な者、フン御待ち遠うな  
りや御やめやす、無理とは云はぬ、併し、と云ひつゝ紅筆さら〜

天下取る時はいつたか分らねど

とつたらうんと御馳走するべえ

となぐりつけ、飄々として飛び出しぬ、見るもの聞くもの、癩の種ならぬはなし、  
之れでは折角の通力も役に立たず、いでや暫く自然の靈光に浴して、天地の大觀を  
究めんものと、少しく仙人臭き心になりて、西江より北江の邊りを遡るに、流石や  
廣東省の大富源、田畑遠く開けて際涯なく、兩岸の菜花は春知り顔に咲き揃ひ、蒲

帆連續して汪洋たる江水を繞ふて上る、遠村近落濃淡翠綠烟霞の間に隱見す、晝とや云はまし詩とや云はまし。

黄金敷く菜の花分けて我船は

蒲帆三丈春の風孕む

大部俗氣を離れた心地、先づは大丈夫、されば之より彼のチャンコロ共が誇稱して、五嶺の口を扼し、百粵の衝に當り、地大に物繁に、誠に南郡の雄なりと吐言し居る韶州見物するべいと、駈足勿々行きついた。

なる程、中々盛んな所、瀆水武水に跨がつて、町も綺麗に店も澤山、分けて目に附く畫舫樓船ちらちら見ゆる綺羅姿、之れぞ此地の名物と聞いて引込むみの作ならねば、サア來い來れと、五六の知人を左右に従へ、一大樓船に乗り込みぬ。

(下)

さる程に蘭燈輝き、篆香薰んじ、朱盤玉杯、所狭しと並べられぬ、酒は瑠璃の泉

を湛え、魚は湘江の鮮を誇る、大姐は嬌に、小姐は艶、靜かに紅膏の唇を漏れて、先生請坐と呼ぶ、コ、みの作の大得意「ウム〜、ヨシ〜、夫れ歌妓を呼べ、琵琶子も來れ、夫れ飲め、ホラ酌げ」、琴瑟縷々、嬌聲嫋々、十有七人の妙音、口を揃へてピー〜ドンチャンとやりだした、嗚呼男兒四方の志未だ酬いすと雖ども、萬里異郷の地、悠然才媛名妓を會して此豪興を縦まゝにす、豈亦一時の快に非ずとせんや、それ盛り來れ琥珀の光。

座中一美人あり、名を秋香と呼ぶ、玉顏麗質高く群に秀で、雲鬢輕く霞むの所、芙蓉特に明かなり。水國三千の歌舞を壓して才名噴々一世に馳せ、冶郎膽を失ひ、蕩子産を破る者、滔々として之れありとかや、而かも操持高潔、輕々しく人に許さずと云ふ、此夜亦孤鶴の群鷄に伍するが如く、獨り超然として微笑、他の嗷々を聞くのみ、我同行の者、其一瞥を得んと欲し、競ふて杯を献げ、談を挑むと雖とも、風と受け柳と流して、未だ一笑の應答だに得たる者あらざりき、況んや奇裝異郷の

(212)

客何を以て其半願の情に接し得べけん、乃ち一計を案じ、掀頭一番筆を執り、

秋香幽菊半籬風。

春艶妖桃一點紅。

流水有情花不悟。

綠波空惑櫓聲中。

と出駄良目のへボ詩一首を書し、小媛を招いて彼女に示さしむ、怪しむべし、彼女の双頬少しく紅を潮して、雲鬢軽く動くを見るや、靈光一闪、余の面に注いで、破顔桃花の唇より湧き、蓮歩楚々羅裙、波を起して、靜に余の傍に來り、纖手を肩に加へて曰く「郎は是れ上國の風流子なるからんや、何を以て胡服人を揶揄せんとするか」と、嗚呼余が熱血は颯として迸れり、滿堂の拍手は雷の如く響けり、祝杯乾杯、余を圍んで迫る、愉快々大愉快、千杯萬杯、豈辭すべけんや、痛飲鯨吞、醉ひ心頭に發し、阿嬌の傍らに侍べるも忘れて放歌亂舞、ヨサコイ、ド、イチ、コラサノサ、口に任せて唄ひ、手に従つて躍り、昏醉其自ら倒れしを知らず、半夜少しく醒めて其傍を見れども、掌中の珠玉香として跡なし、聞く、彼女余の醉態に驚

き、嗚呼之れ可厭の東洋鬼なりしかと、蹶然袖を拂つて去れりとか、呵々。

此失敗に糞腹立ち、あたら仙術を俗化せしと後悔し、まあ〜歸るが増しと思ひつゝ、蕭々たる春雨に幾分其腸を洗ひ落し、

春雨にもゆる汀の若草に

船よせ來れば川千鳥飛ぶ

など詠しながら、廣東迄歸りしに、後ろより大狂先生〜と呼ぶ者あり、顧みれば先年謀反仲間のチャンコロ殿、「其後は如何、聞けば再度の御旅行又々御加勢被下る積りか」と、以ての外の尋問に、コ、じやとみの作一生の智慧を絞りて、

江水三千里。 春風送客船。

滄浪君勿唱。 青渚白鷗眠。

(213)

と示したり、チャン先生フ、ンと計りに答へもなさず、「そんなら近頃何御商賣」と、無禮の言葉は癢にさはり、「何も糞もあるもんか、棚の牡丹餅。落つる時迄待つてる

(214)

のよ」と、云ひ乍ら

三十年來夢。

微笑只撫髭。

暫踞南海岸。

天地一竿垂。

となぐり附けたるに、チャン先生大口開いてカラ／＼と笑ふ、其聲にフト眼をさませば、身は依然たる離れ小島の肘枕、夢とも幻とも分らぬまゝ、筆のまに／＼かきしるしぬ。

○

冢よぶや孤村三家の秋のくれ

枯尾花そよぐと見れば獵夫かな

### 唐 草 織

(一)

あはれみの作、花作りとなつて忍び入りにしもあらねば、幼君を守護する野心とてはさらさら以てなく、唯高砂の島根の月にあこがれて、運よくば絶世の美人を得て、熊手片手に共白髪の契こめんと望みしことは、越中のそれとはづれて、海原遠き諸越の、離れ小島のわび住ひ、誰れ白波にぬれ衣の、とむらふ人もあら浪に寄せては返すもの思ひ、おとづれそめし秋風も、妻戀ふ頃の鹿耳礁、獨り旅寐のかなしさ、織り出す浮世の唐草織は生蕃くさき大和尚の、寐言唸りと間違へず、潮路へだつる八重垣姫の一人二人は泣いてたべ穴賢。

鼓浪洞天唯突兀として秋立ちぬ

秋立つやシグナル臺の旗のゆれ

(215)



片 嶺

立 秋 や 虎 頭 山 下 の 夕 嵐  
 タイフーンの噂は絶えて秋立ちぬ  
 立秋や吐息をさまる孕み豚  
 立秋や静にそよぐ野羊の髯  
 われ一人妹戀ふらしや鹿耳礁  
 南太武山の塔は屹として銀漢流る  
 出帆旗われ見るからに秋立ちぬ  
 白雲漠たり嗚呼臺灣は天の一方

(二)

あいや、みの作候、騒ぎ玉ふな若殿原、いざ鎌倉と云ふならば、瘦せたりと雖とも膝栗毛、破れたりと雖も黒一貫に身を固め、禿筆縦横に振り廻さば、天魔鬼神も物かは、十千萬里の道程も、たい一散に馳せ参すべきに、高の知れたる一葦帯水、遠

磨様でも顛げ落ちずに渡るじやないか、イヤサ足の無いのは同様なれど、拙者はあの字一字が多いは上手、空財布に山嵐を吹き込んで、ヤツと擔かば風船同様、何、羅東和尚の鼻息に吹き飛ばさるゝ心配無用、チャンと黙庵老の八卦手の筋、辻占に出て居る焉、いでや苅り集めたる駄句一束、秣の用意に差送れば、馬に鞍馬の小天狗大天狗、煙りとなつて鼻から出よ、喝。

鼓浪嶼にて

待 宵 や 越 女 吳 郎 に 約 す ら く  
 名も知れぬ草に宿るや白露あはれ  
 雁の音に一人寐られぬ夜永哉  
 月 十 句

月 今 宵 泊 り 戎 克 に 胡 歌 響 く  
 歸 心 萬 里 白 波 躍 る や 今 日 の 月

唐 草 織

片 鱗

仲麿や月に胡人の喧しき  
缺舌の夷人も出たり今日の月  
軒かく隣の豚や今日の月  
月高し軒に寐たる苦力の顔  
月港も浮宮も近し月見船  
國姓爺月見の臺や芋畑  
名月や吳山に向けん馬の鼻  
八幡織旗銀鞍照せし月や之れ

(三)

歌てふものは、人の心を和らげ、鬼神を泣かしめ、天地をととのふる功德ありと  
たゞへられて、千早振る神世より我日本の本の風流の道、是にまさるものあらじと思  
はれしも、世のするの悲しさ近き頃よりヌタてふものゝ世にはびこりぬ、そは歌に

非ず唯みそひと文字にこねつけたるさま、かの味噌にてあへし食べ物と同じければ  
ヌタと名づけたるとかや。之を読む時は人の頭をやましめ之を唸るときは糖味噌を  
腐らしむ、されど木になく鳥水にすむ蛙いづれか歌を読まざりけると唱へたる古へ  
人もあるなればヌタも亦豚のなき聲位の歌としも見らるべきか。まして言さえく  
夷の國にさすらふ身は、見るもの聞くもの皆異なりて御國ぶりのかげも見えねば讀  
み出る歌もおのづから趣のかはれるは止み難き事になん、見る人心して腐れるヌタ  
とな捨て玉ひそ。

さをしかの、石になりつる、岡のべに

われわぶらしも、露にぬれつゝ。

秋されば、醜のいばらに、白露の

おく間もあらで、風にちる見ゆ。」

唐 草 織

片 鱗

あし引の、やまとはほみ、和田の原

ふりさけ見れば、雁なき渡る。」

諸越も、しぐれふるなり、ふるさとは

庭のもみぢも、いろつきにけむ。」

から山に、いまこそ狩らめ馬に鞍

おく白露の、玉とちるまで。」

秋立ちて、なきくる雁は、はしきかも

妹のたよりを、われ聞かまくに。」

唐人のうたも、かすかに、夜はふけて

海原とほく、月さえ渡る。」

高砂の、島根にかへる、白浪は

月にうねく、照りまさるらし。」

(四)

つれづれなるまゝ、友よりおこせし、文ども、くり返し見てしに、過ぎにし春の  
頃ともおもほゆ、ある親しき友より、戯れに送りし、から歌ども出できぬ、其うち  
に

中庭花開勿見花。空爲見花惹長嗟。

臙脂粧成郎不在。可惜春色強半過。

郎曰丈夫別有志。書劍常遊天一涯。

天涯不知何所樂。十年爲客不思家。

此花年々不改色。妾顔歳々衰容加。

とあるが、餘りにめでたければ、之ををみな文字にして見んとて、

白檀弓、はる來にけらし、我庭は、梅ほころびぬ桃櫻、咲きにはへども、われはたゞ、獨りつまやに、こもり居の、枕つくなる、黒髪は、亂るゝ思ひます鏡、うつろひやすき我姿、粧ふことも奈麻餘美の、甲斐こそなけれ、わが背子は、名をし立つてふ、丈夫の、道し行きけれ、わだつみの、そこともわかず、葦引の、山路打ち越え、西ひがし、旅をよろしと思ひてん、十とせ經にけり、われはしも、たときも知らに、飛ぶ鳥の、行くへもしらに、戀ふれども、逢ふよしをなみなげゝども、見むよしをなみ、年々に、庭に咲く花、色かへね、衰へ増してわれのみは、まなく暇なく背子をぞしのぶ。」

とヌタくりつけぬ。あはれみの作、武骨男に生れた因果、ヌターツ呉れる女もなくてんと嘆息の至りに御座候。

ヌタ呉れる女だになく我はたゞ

御手前味噌をこねまはすなり

## 赤 裸 々

僕が北溪の上流、厦門より五百餘清里、漳平より百二十清里の新橋から、其溪流を下るべく纜を解かせたのは、六月二十一日の正午であつた。船は四分計の薄い板で作られて、少し重い荷を積めばめりめりする位、幅が五尺餘長さが三間もあらうか舳先と艫を四五尺計高くそり返させて、舳艫共馬鹿に大きい舵と左右四丁の櫂とを附けて居る。僕は連れが一人に苦力が一人、夫れに舟子が八人都合十一人、昨日の大雨で非常の出水今日は到底出せぬと云ふ奴を此地駐在の分司から官威を以て嚇かさせ、無理やりに出船せしめたのである。今朝から天氣は晴れ上つて居るものゝ、名残の千断れ雲がまだ綿のやうにふわ／＼して居る、併し其間から照り込む日光は到底傘なしでは居られない。船は濁流滔々たる勢に乗じて、兩岸の山岡樹林走るが如く下りつゝある、僕等は積み重ねし茶袋の上に安坐をかき得意満面と云ふ有様で

あつた。

「おいどうだ愉快じやないか」

「ウム速いな蒸汽船位のものかな」

「どうして厦門石碼の蒸汽より餘程速いよ」

「おゝもう村が見えない」

「彼の山の工合瀧の模様丸で内地だ」

「柳の下の水牛本當に晝のやうだね」

四圍の風光を品評して、夫れ五里來た、十里、二十里、此様子では明るい内に潭平だと云ひながら、三時過ぎには既に五十餘清里を下つたのである。兩岸の山愈々高く迫つて流は愈々速度を加へて來た。谷間々々の平蕪の地に點在する小村や、段々に開墾せられて居る青々しい山田は一瞬の夢と過ぎ去つて、巉巖絶壁孤松の天を望んで聳ゆるものや、蒼苔滑かなるの邊、蔦桂の危くからんで半ば溪流に垂れつゝあるの

や、或は少しの凹所に此所ぞと計りに名も知れぬ雜木の叢り茂つて居るのや、山頂遙かに樵路が通じて斜めに帯を投げたやうなのや、目に觸るゝもの悉く奇拔峻峭となつて來た。

「そら向ふに岩が一つ見えた」

船は巧に左に避けて、岩に激した餘勢に乗じてスー！

「愉快々々そら又今度は二つ出た」

眞正面に急下した船は、俄に舵を轉じて右の岩をスーと抜けた。

そら又左、右、愉快々々と僕等が歡呼の中に、斯の如き岩に激せる早瀬を十箇所計も下つた。すると流が屈曲して潭の如く靜かなる所に出た。忽ち見る、舟子八人一齊に上衣を脱ぐ、袴を脱ぐ、禪子を取る、生れたなりの赤裸一貫、且それ彼等は皆草鞋をはき出した。

「やア素裸體に鞋ばきとは前代未聞だ」

と僕等が感歎聲裏船は早くも前進して潭を出で、一轉したが、こりや又どうだ！

兩岸の絶壁削るが如き所、前面屹として三個の巨巖が鼎足の勢を以て突立ち居る。左に避けんか、右に避けんか、巖に當らずんば、絶壁に碎くるのみ。本當にこれこそどうすると思ふ間もあらばこそ、舟は滔々たる濁流渦中に直下した。

大舵二人權取二人宛前後八人の舟子等は皆血眼である、やアと一聲最初の岩を避けしと見るや、左の岩！ やツと大舵右にかはして左邊の權取金剛力、エーと計りに舷端摩りつゝ進むや否や、絶壁千仞あはや微塵の一刹那權を逆手に右船頭、大舵諸共絶叫一聲、船は僅かに三尺距る。

僕等は衣上の飛沫、握れる汗を拭ふ暇なく、僅かに虎尾の患を免かれて又忽ち毒蛇の口に入らんとする。見渡せば奔湍怒濤を逆捲き、隠見出沒する怪石鬼岩恰も劍を植ゑた如くで、最早茫然として運を天に任すの外はない、赤裸々の船頭様を杖とも柱とも頼まねばならぬのである。彼等が舟を遣るの巧妙は如何にも僕等をして舌を

捲かしめ、萬死に一生を得せしめた思がした。

濁流滔天船は木の葉と掀翻さるゝ中、右に避け左に轉じ、舉手投足、一瞬過ては骨灰微塵の危き所を、縦横無盡に遣つてのけたのである。激浪は躍り入る、船底は砕ける、逆捲く濁波を頭上より浴びながら、酌む、塞ぐ、八面六臂、怒號叫喚、木碇に響き滔聲に和して一時は實に凄じき修羅場であつた。一呼一吸僕等は宛然濡れ仁王の如き彼等の動作を見つむる計りであつた。

今や赤裸々の理由も、鞋ばきの譯も充分讀めたので中々笑ふ所の騒ぎでない。併し此感謝すべき彼等の働きでも、猶對抗し難い運命に再び接する場合と成つたのである。夫れは今日の出水の爲め、三段の瀑布に成つてる隠岩が分らぬからで、遂に船は空舟にして綱で下ろし、僕等は鳶に攀ち桂にすがり、斷崖に沿ふて岸の岩間を匍はせらるゝの止むを得ぬ事に至つた。

折悪しき夕立と此匍匐に依つてツブ濡に成つた僕等は遂に彼等の嘔に倣つて素裸

體と成らざるを得なかつたので、彼等は破顔目笑其重き唇を開いて、

「どうです今日は船が出せないと云つたのに……………」

僕等は答ふる所を知らない、唯相顧みて苦笑するのみであつた。

赤裸々の船頭立つや雲の峰

夜に入るの前少時、如此して百二十清里の漳平へ着いたのである。

閩江上流にて

夕立のまだ晴れのこる雲間より

月かげ青し高灘の川。」

建寧山中

秋されば谿山路の露をふかみ

わが旅ごろもぬれまざるなり。」

## 流汗一滴

油汗の流るゝ今日此頃となつては、中々佳句妙想も浮び出る事じやない。而かも殺風景な禿山岩々の照り返しにかゝつちや到底駄目だ。夫れから見ると臺北は灣的ながら多少の趣味がある、淡水川原の夕涼み圓山田圃の螢狩などゝくると、意氣な湯形に洒れ團扇、駒下駄雪駄のバターチャラリと出懸けらるゝ楽しみは實に以て美的感念を發揮せらるゝものじやて。夫れ然り、然るが故に臺北の吟壇諸子が近頃めつきり進歩せられたと云ふ譯でもないが、其歩調の整然として來たのは、此みの作も双手を擧ぐるに踟躇しない、乍併風山子とやらが云はれた通り、想の平板に陥つた弊は歴然として見受けられる、何とか此所一と息改良を願ひたいものだ、去らばさう云ふ本人はと尋ねらるゝと二言は出ないが、嘗てはみの作候騒ぎ玉ふな若殿原と迄ほざいた口の手前黙つて引込む事も出來まいから、此春旅行中の即吟に係る數句を

(230)

左に録して諸子の批評を願ふとする。而して拙者も爾後吟壇の句に對して遠慮なしの横鎗を入れる積りである。

左の數句は悉く實景を直覺的に讀んで、幾分餘韻のあると自惚れて居るのだ。

波紋々漁翁網打つ春の川  
陽炎や水牛の糞の堆き  
河蟬や汀の葦に春の川  
若草の汀に網を干してけり  
春日永市の鶏籠に鳴く  
春風を孕むや孤帆三千里  
唐人の田種や腰の長煙管  
春の旅橋夫の背を虱はふ  
鶴鴿や早瀬を下る筏守

(231)

躑躅咲く龍巖州や水清し  
灯取虫死骸ならべて夜は明けぬ  
酒飲み盡し詩吐き盡して太白眠る  
蚊は遁げて蚊帳は焼けて男哉  
カンテラや蚊遣に咽ぶ木賃宿  
蟬鳴くや宰予あくびをニツ三ツ  
五月雨に獨り香たく男哉  
胡坐して見るや青葉の舊山河  
黒ン坊の鉢巻赤き暑さ哉  
秋立つや伏見は京の町つゞき  
天官を招けば高し天の川  
秋夜永弱冠にしてわれ大志あり



伊東詞兄見來訪即賦四絕以呈

弟 峰 蓮 具 稿

啞	然	握	手	冷	歡	客	○	詩	酒	更	開	霜	雪	胸
醉	舞	休	噓	故	狂	態		天	涯	應	雨	幾	人	逢
須	將	酌	而	忘	悲	哀		去	此	難	逢	笑	口	開
別	後	思	君	何	處	見		古	龍	梁	月	照	顏	其
故	人	雲	散	錦	鱗	沈		消	瘦	豈	云	貧	病	侵
誰	識	當	年	游	俠	子		飄	零	相	遇	話	冰	心
宜	情	難	思	兩	相	戀	○	吟	楊	綠	聯	又	乍	離
不	耐	秋	風	分	汝	手		巴	山	何	日	語	離	期

### 廈門の大火を見る

朝寝坊のみの作、まだ起き出でぬ三日の朝、火事あり起よと呼ぶ者あり、高のしれたるチャンコロの火事騒ぎ、物々しやと氣にもとめず、悠々と楊枝啣へての永雪隠、顔を洗ひ朝食を済し、さて火事はと問ふに、龍頭(鼓浪嶼)に一軒焼のボヤ、遠くの昔に消えたりと云ふ、ソナナ事だらうと笑ひながら一友と共に田尾の濤聲に對して秋風に嘯き、歸路鹿耳礁坂に至れる時、一道の黒烟厦門の方に昇るを見る、あれは何じやと尋ねしに、蒸汽出て行く烟は残る多分誰かの癩の種ならんと答へて友は呵々と笑ひぬ、へん瘦せてもみの作男で御座る、何時までそんなに思ふて居るか、あしらはひながら家に歸れば、八丁礫の異名を取たる忠僕老才がまめくしくも進む豚汁に腹鼓を打つて晝餐を済しいざや之より古人を相手に暫くは無何有郷にも遊ばんかなと思ひながら腰打ち伸ぶる折しもあれ。

大火！ 大火！

と怒鳴りつゝ飛び込み來れる一友あり、されどみの作煙草ぶかゝ火事は今朝程消えけるものと云はせも果てず、夫れは龍頭、今は厦門が非常の大火、のん氣男にや關せず焉と、走り出づるを、暫く待つたと引き留めて戎服輕々ステッキ小脇に共に揚旗山へと駆け上ればやあゝ之れは天に沖する黒烟の下より吐き出す眞紅の焰の舌は已に十餘丁をも嘗め盡したる有様

火の手は三方

に立ち分れて、吹きすさむ東北の風に煽り出てられ一瀉千里の勢を以て燃立ちながら最早海岸に出でんとするは、其本隊とも見るべく、うづまく風に乗じて横へ横へと燃え擴がるは、其右翼にやあらん、風をくゞり軒を傳ひ、逆襲の勢ひ烈しく風上に燃え移るは其後陣にやあらん、三方共に燔燎の勢を逞うし、雲霞の如く棚引き亘る白烟の中より、黒烟むくくと立ち上るは又もやついたと見る間もなく、下よ

りパツと吐き出す火焰、すさまじしとも譬へん方なく風は愈々烈しく火の手愈々盛んに海岸居留地へ眞つかぶせの勢ひ、之れでは最早

銀行危し

三井も商船も亦危し、同胞の義務傍觀すべきの時ならずと、暮らに山を下りて波止場に至れば、こは如何に一艘の舢舨もなし、それと路を轉じて領事館の前に至れば、はや避難の老弱舟に依りて免れ來れる憐れさ、中には良家深閨の婦女とも思はるゝ人々、美服金環錚々たるも、蓮歩蹣跚、氣もはらゝ、潜然たる涙拭ひもあへず怨めしげに火の手を見てアレヨと互に叫ぶのみ、我等は唯先を急げば繋げる舢舨に乗り移らんとするに、あはれや雇はれて人を待ち居るなりと叫ばれて此處も駄目じやと疾走駆け足龍頭の波止場に至れば、幸ひ今歸りたらんと見ゆる舢舨三艘ありあはや乗らんとすれば、船頭野郎大聲に、今日は賃錢五圓なりと弱身に附け込む平時の百倍、踏ふ友を目で知らせ、飛び乗りあへず較緊く烟捲き込む波間を分

けて急がせたり、海岸居留地前五六の舳頭はあれど、荷船小船の蟻集して混雑云はん方なく、到底舳舟を着くべき様もなく、漸く水仙宮前の波止場に舳舟を着けさせ、やをら飛び上りてそれと二十錢銀貨を投げ遣れば不好くを連呼して追掛け来るを己れツと大喝一聲、スキツキ左手に身構へて寄らば打たんす見幕に流石の船頭だちくくと二足三足たちろくを尻目にハツタと睨み附け、人波打てる群集を分けて臺灣銀行へと駈け附ければ、はや屋内は黒烟濛々、赤羽支店長始めとして向ふ鉢巻甲斐くしく、

## 丈餘の鐵棒

打ち振りく煉瓦を碎きて水を懸け金庫を覆ふに餘念なし、最早大抵片附きたれば金庫一つを守りて落城と覺悟定めて候と語られぬ、いでやみの作御手傳と呼はりて鐵棒りふくとしごきと云ひ度が、中々重くて自由にならず流汗淋漓と出る計りもう大丈夫と云ふ聲にはつと吐息を漏しける。銀行を出て、商船、三井、志信洋行を

見舞ひたるも皆充分に片付き居れる有様に、先づ安心と火の手を見れば、風位少しく變りたるも火勢益々猛烈を極め五方に分れて燃え移り颯と吹き来る風にドーと焼け落つる梁、土壁、猛々と立ち上る火炎の中より號泣の聲の絶えくりに聞ゆる物凄さ、焦熱地獄も斯くやと許り思はれたり、辮髪衣服を爛らし顔も手足も黒焦にして荷物を運ぶチャンコロの憐れさ、而かも皆手にく赤燭宜しくと云ふ、

## 拔身の白刃

を振りかざし、おめき叫んで押し合ふ様の可笑げなる、中には六尺有餘の青龍刀、蛇矛、からめ鎗、先込鐵砲など擔ぎ出す有様は百鬼夜行の晝を其儘、皆是れ盜賊防禦の爲めとは面白し、珍無類古今未曾有の火事見物に物好きなるみの作は烟に捲れ不思議人なだれに押されて税關の後ろの方に出でける折しもズドンと銃聲一發……。

聽て頭上を掠めて飛び行けるに吃驚敗亡命有つての物種と遮二無二押し分け海岸

に走り出でしにアール不思議や、

船火事く

と騒ぎ立つるには如何に、遙か海上に荷物を積んで漕ぎ出せる二艘の荷船炎々と燃え上りぬ。火の付き居れるを知らず積み出せしものか、人々唯あれよくと打ち騒ぐのみにて手の附けん様もなく、近くに群れる船共の逃げ惑ふ様は赤壁の戦を目前に見るの心地して當日の一奇観なりき。

海岸には例の赤法被着たる支那兵一小隊、警護の爲めかうろつき居れるも、元よ何の役にも立たず、道臺の役人にもあらん、赤房附けたる饅頭笠をかぶり、長衣を引すりながら、大袈裟なる文字を書き連ねたる旗を建て、狼狽へ廻るも却て邪魔者、消防もなければ警察もなく、各人各個の自衛自守、赤鯛の鈍刀も是に於てか必要ありと云ふべく、破れたる支那カバン、蓋なき箱、足なき卓子、缺け茶碗を入れたる籠、四足を縛れる豚等の貴重なる貨物を護衛しつゝ、是等赤鯛の大人は控へさ

せ玉ふなり。中には疲れて午睡せる後ろより、盗兒の引掠ふあれど、傍人は關せず焉、ワイくゴタく右往左往逃げ迷ひ、狂ひ廻る有様は、小桶に芋洗ふの比にもあらず、流石のみの作、あちらにうろくこちらにうろく眺めまはる時、

轟然爆發

大地も崩る響きと共に、税關の後ろの方より白煙濛々と起りて、前後も見えず立ち塞りぬ、是れ防火の爲め税關にて背後の二三軒を爆發藥にて、打崩したるなりと後にて聞きたり、風に烟の散せると見る間に、銀行に隣れるドクラス會社の窓より真紅の火焰魔王の舌の如く吐き出し始めぬ、時既に黄昏なれば火焰天に映じて紅團々、飛び来る火の子續紛として衣に墜ち、到底海岸に居らるべくもあらねば、水仙宮前迄逃げのび漸く解舟を求めて、ほふくの體にて歸宅、一浴半陶疲れし體を横ふれば、身は白雲に乗じて廣寒宮裏の人となりぬ。

翌早朝厦門に渡りて聞くに、其失火せしは龍頭と殆んど同時にして、即ち午前八

時より翌朝の七時に至る、殆んど二十四時間の長きに亘り延焼

一千五百餘戸

竈数は三千に超ゆと云ふ、其火元は石埕街義珍號なる菓子屋の過失なりと言ふも、或は鼓浪嶼と同時に火の揚れるより見れば、盜兒の手に出でしならんと説く者もあり、今春正月關帝廟籤示ありて廟の近傍より失火して、一千餘戸を焼失すべしと愚民大に騒ぎ出し、道臺爲めに告示を發して誠めたるは、恰も之に當れりなど、迷信を擔ぎ廻る者もあり、焼跡の茫々として焼残れる土壁等の崩れかゝる様、遼東戦後の慘狀と思ひ合されて憐れなり、こゝに氣の毒に堪へざるは、太古洋行所有温州號の

船長フアイン

にして火事の朝入厦せるが、大に消防に盡力せる中烟に捲かれ、焼崩るゝ土壁に打たれて即死し、屍骸も容易に見當らざる由なりと、其他清人の焼死せしも尠から

ざるべけれど、未だ其數を知り難く負傷者の如きは擧げて數ふ可からず、兎に角厦門市街中最も繁華の街衢を悉く焼失せしなれば、今後の不景氣思ひやられ、饑饉等來らねばよいと杞憂を抱く人あり、併し我同胞の家屋は四方火焰に包まれながら焼け残りし久光堂の如き、三方焼失せしも僅かに半焼にて喰ひ止めし臺灣銀行の如き一軒として全焼の災を蒙らざりしは、實に愉快に堪へざる所にして、是れ我國厦門を手に入るゝの前兆なりと、みの作得意の御世辭を振りまくを得たるは、先づ我同胞に取りて目出度しともめでたし。

閩 山 道 中

繁り生ふ萩の小路を分け行けば

花ちりみだれたび衣うつ

崖高し下に茶の花一畝かな  
 旅にやみて秋の夜永をきりくす  
 暫くは月に嘯く遊子かな  
 爆竹や静かにのぼる今日の月  
 われ死なば捨てよ古園の小萩原  
 轅門の上に鳶舞ふ小春かな  
 小春日や水南橋の人ばかり

合せ貝

(一)

『ひで川』と書いた磨硝子の點燈が、御影の敷石を照して、小綺麗に繁つて居る雨側の植込は、豪駄師の手際をこれ見よがしと云ふ風である。

斜めに敷石を傳つて、左の行き止まりが、両面落しの千本格子、一間二枚の粹な建附の、中は鏡の如きセメント叩きの片隅に、御定りの吾妻下駄が一足、小八文字に脱いであると云ふ寸法。

『チリ、ン〜』

と響いた戸の開く音に、走り出た十七八の仲居、浮腰片手つきと云ふ體度で、

『入らつしやいまし』

漸つとまだ敷居を跨いだ計りの男、當世向き變り縞の洋服に茶の中折れと云ふ扮

装、正面の壁に懸つてる照り返しのランプを眩耀さうに、大きい身體を細藤のヌテツキに操りながら、

『お女主人は居るかね』

高い鋭い聲をわざと溫和しくしたやうな調子、仲居は思はず見上げたが、流石は場所柄、

『へい』

と云ひながらも、客の様子をジツと眺めて居る、男は重ねて、

『一寸呼んで呉れないか』

少々テコ變と見えて、仲居はもぢく、

『どうしたのお玉』

次の間よりヌツと半身を現はした三十五六の年増、男は見るより、

『ヤーお松さん』

年増は喫驚！

『あら、まあ、紫藤さん！あなた一體マアどうなすつて！』

『フム矢張り此處だつたか』

『矢張り此所もないもんですよ、サア早く御上んなさいよ、何をぼんやり立つてるんですよ、お玉お前もどうしたんだね、早く燈火を御座敷にあゝさう、奥がいゝよ』

『ハ、、相變らずだな』

『そんなに變つて堪るもんですか、サア御帽子を持ちませう』

下にも置かぬ待遇ふりは、多年鍛へた老巧の手腕が顯れて、間取りの具合、室の體裁、何から何まで萬事の注意が行届く、それで待合と云ふ待合の中で山の手屈指の評判を取つたのも、僅々三年の新開業と聞いたなら、誰しも女將の切り廻しの巧いのに領かぬ者はない。

お松と云ふはこの家の女將で、三十五六の小肥りのした女、容貌は十人並落ると

(246)

云ふ方であるが、愛嬌のよいのと、御世辭の甘いので、大邊人附合の宜い質、三年前迄は同じ赤坂の巴と云ふ料理屋に、女中奉公をして居たが、容貌の悪いと云ふ諦らめが、辛抱の土臺となつて、心の溫和しい徳には、客からも藝者や朋輩からもお松さんくと立てられて、少々小金の貯つた所ではんの形計りの待合を始めたのである。夫れが運に叶つたと見えて、客もお松の待合と云ふので、どん／＼やつて来る、藝者も彼所は遠慮がないと云ふ風で、客を啣へ込むと云ふ繁昌。二年目の春から普請に掛つて、今では赤坂待合の雄鎮と云ふ迄に仕上げたのも、矢張りお松の切り廻しが巧いからと云はねばならぬであらう。

紫藤もお松が巴に居た頃の昵みであるが、何年振りかで所謂お松の待合を尋ねて来たものらしい。今しも茶室めいた奥座敷の床柱に身を寄せながら郡内の布團に安坐をかいて、そして何やら感に打たれたと云ふ様子に頻りに四方を見廻はして居たが、やがて一本のシガーを点火けて、香烟一條、ホツと一と息ついたのである。

廿七八、三十の坂は今一二年と云ふ位、色の淺黒い苦味走つた顔、凛々しい一文字の眉、涼しい眼ではあるが、底にどうやら一種人を射る様な光の有るは、多年淫世の辛酸を嘗めたものか、併し其口元の愛らしさ、無邪氣が云はする高聲も、却つて愛嬌となる位。

『お松さん、いやお女將さん、大邊いそがしいじやないか』

『なんですね、お女將さんなんて、ホ、お構ひなしで濟みません、何、一時にたて附けたもんですから夫に手が足りないんですもの』

と云ひつゝ膳を運び來れる仲居のお玉を見返り、

『ほんの之れ一人ですの、お負けにカラ山出しときてるんでしやうホ、』

『やア、先刻は少々困つたね、お玉ちゃん……だつたね』

『ほんとに失禮、ちつとも存じませぬものですから遂ひ私は……』

『何だね、此兒つたら、今だから宜いが、四五年前なら大變よ、お前、紫藤さんを

(247)



知らないなんて大した恥になるんだよホ、ホ、』

云ひ了つて紫藤の顔を見遣つたが、サツト散らしぬ薄紅葉、さても不思議！

## (二)

お松は紫藤のさした盃を、一口呑んで下に置きながら、

『まあ一體紫藤さん、どうなすつたんですよ、貴客は、ほんとに御久しいじやありませんか、エーと足懸け六年になりますね！ それに端書たら一本被下らないですもの、あんまりですわ、ホ、併し御健在で何よりですね、先の内は貴客の御朋輩がちよい／＼入らしつて、何時でも貴客の御噂が出たんですよ、何でも大邊遠い所の外國に入らしつたんですつてね！ 能くまあね！……』

『アハ／＼、大層文句が多いな、お松さんに御世話になつたのは、決して忘れはしないよ、併しつい浮世の義理てやうな譯でな、アハ／＼、東京に歸つてからまだ一週間しかならないのに、如斯ちやんと尋ねて来るから親切だらう、アハ／＼』

笑ひながら一杯ぐつと飲み干しぬ、お松は酌しやうとしたが、酒の少いので手を鳴らしてお玉を呼んだ。

『御銚子、あちらの御座敷は宜いのかい、何時もの通りなんだよ、藝者衆は来て？ ウム私もすぐ伺ひますつてね、二番の方が喧しいつて、何、いゝよ、藝者衆が来ると溫和しくなるんだから、彼の方の癖なんだから、お前附いて御出よ』

『サア紫藤さん御熱いの、少し御過ごさないよ、暫くじやありませんか、私の御酌でいければ奇麗なのを御周旋しますよ、ホ、』

『ナアニ其んな事はないよ、お松さんが如斯なに出世したのを見ると、僕は愉快でならないから大に飲むよ、併しお松さんは忙しさうじやないか』

『大丈夫ですよ、今時の御客さんは皆一件主義ですから、ホ、なまじ私共が伺ひますと、却つて御邪魔になるんですもの、貴客方の御出なすつた時分とは、から御客様の遊びが異ふんですからね、そりや御話しになりませんよ、愉快に騒いで綺麗

(250)

に御歸りになさる御方なんて、ありやしません、夫れに枕金がどうだの玉がどうだのと文句計り仰しやるんですもの、私共の立瀬がないじやありませんか、どうして貴客方のやうな御遊をなさる人は、今時薬にしたくつても……夢にだつて見る事が出来やしませんよ、ホ、くく』

紫藤は杯をお松にさし乍ら、

『久し振りでお松さんの氣焰を聞くとは面白い、實際今の御客はそんなのが多いだらうな、併し僕などの遣り方は、遊ぶと云ふより氣が狂つたと云つた方がよかつたんだからなハア〜』

『イ、エ貴客……遊ぶ位ならあゝで無くつちや駄目ですよ、貴客の御連れさんたら皆御揃ひの御紋附で、ホ、思ひ出しても面白う御坐いますわ、ホ、くく皆様が不殘編笠ときてるんでしよう、丸で御芝居のやうでしたね、そしてさつぱりして在らつしやるんですもの、藝者衆の騒いだのも無理じやありませんわ、ホ、くく』

と云ひつゝ紫藤の顔を打ち見遣りぬ、酒のせいでもあらうか、或は花に迷ひし胡蝶の夢を思ひ出したのであらうか、輝く計り顔を染めながらグツと一杯飲みほして、『併し私共は面白う御坐いましたが、御世辭なしに云へば、つまり貴方の御損でしたね！ 目上の方でも、誰でも關はずびしく御やりなさるもんだから遂いあゝいふ事に成つたんでしよう……』と聲を小さくして、

『貴客と一緒に御方は皆佐官さんに御成んなすつて、それ〜田舎の大隊長さんを勤めて居らつしやるつて、先日中川さんが御話しましたよ……』

何か考へたらしく沈むやうな調子で、話したが、相手の紫藤は一向感じたらしくも見えない、口に啣へて居たシガーを手に持ち直して、

『とう〜又御忠告と云ふ事になつて來たね、僕も追々人並位になれそうだから安心して呉れ玉へ。どうも昔の狂ひ騒ぎを話の種にされては困るよ、アハ〜〜夫

(251)

よりあの時分の藝者は一人も残つてるのはありやしまいね……」

「何ですね、貴客にも似合ない、そんな遠廻しに云はないで、己れの色女は何所にどうして居るか知らないかと、ザツクバランに仰しやいよ、オホ、く」

と怪しき一眇を紫藤に與へぬ、紫藤は高聲に笑ひながら、

「アハ、冗談じやない、人を馬鹿にしてる、僕はあんな騒ぎこそしたが、唯の一度も藝者と關係した事などないじや無いか……」

「ヘン巧く仰しやいますよ、小米さんと貴客とは切てもきれない中だつて、大勢藝者衆や御連れさんの居る所で御披露なすつたのは忘れたんですかホ、く」

「ヤアあれかアハ、詰らない、ありや何んでもなかつたんだ……」と頭を一邊撫で廻しぬ。

「そんなに胡摩かさなくつても宜ござんすよ、ホ、過ぎて了つた事だもの……」

「いや胡摩かすも何もない、ありやほんの狂言だつたのだ、まあ聞き給へ、今すつ

かり話すが、手短く云へば彼女等のベテンに懸つたんだね……」

と紫藤は二三杯引かけて説き出しぬ、そも藝者のベテンとは如何なる事か？

## (三)

紫藤はやがて、

「あのお松さんも知つてるだらう、僕と一諸に居てよく飲みに来た杉田を、彼れがさ、小米の妹分の小奴に大邊惚れて居たのだ、所が彼奴自分でどうすることも出来ないものだから始終僕に頼んだものだ、併し僕はその頃から少し考へがあつて未始終之れと見込の立つ女でなければ、關係を附けないときめて居たから、杉田にもまあ暫く待てと云つて押へてゐたのだ、處が奴さん能く、堪まらなくなつたと見えて小米に持ち込んだらしい、そこで小米はあ、云ふ御轉婆な物好きな藝者だから、僕のあの時分の狂ひ振を何とか思つてたんだらうさ、夫れに酒は飲んでも女は嫌ひだと云ふ評判が有つたものだから、愈々擲諭ふ氣に成つたものと見えて、杉田に、僕を

自分に取り持つなら小奴を世話しやうと云つたやうな約束が出来たらしい、夫れからと云ふものは、杉田の奴、毎日僕に小米の事を云ふのだ、やれ藝が達者だの、氣前が面白いの、大邊僕にござつてるのと、而して是非一度逢つてやり玉へと勧めるのだ、併し僕は肯かなかつた、所が支那から友人が歸つて来て、湖月の宴會のあつた晩、僕は非常に酔つて歸らうと思つて車に乗る所に彼奴も出て来て、一諸に歸らうと云ふから、宜しいと云つて出だしたが、僕の例の癖で車の上で熟睡しゐたが、梶棒の下されたので、ふいと目が開くと、それ松が枝の入口だらう、僕は譯が分らないけれど、門口で野暮も云へないから中に這入つたのさ、所で杉田の奴が小米との約束を打ち開けて泣くやうにして頼む、僕も腹が立つたが、餘り可憐そうでもあるから、よしそんなら僕から小米に談判して、關係は附けなくつても小奴を君に周旋さすから、呼べと云つて小米をかけた、直ぐ來た、談判した、彼女の云ひ分が面白い、『宜しう御坐います、貴客がそう御頼みなさるなら、屹度私が引受けて小奴さん

を杉田さんに御世話しませう、併し私も姉様とか何とか云はれる身體ですから、其顔丈立つやうにして戴きたい』とかう云ふんだ、そこで僕は、何か怪しい事でないれば承知すると云つたら、彼奴、『へい貴客がそう潔白に仰しやるのに、私が無理に關係附けやうの何のと申ません、併し女の口から惚れたとか、はれたとか云つたんですから、ほんの一度貴客と關係したと云はせて下さい』と云ふんだらう、アハアハハ、實に馬鹿げた話、何だか今話すのも恥かしいやうだアハハハハ』

紫藤が大聲擧げて笑ひ出せば、お松も吹き出しながら、

『何ですね、人を据ゑ附けて置いて、御惚氣も大概にしなさいよ、ホ、ハハ』

『いや惚氣どころじやないよ、實に馬鹿ハハしかつたが、其時は困つたよ、杉田の方を見ると、眞剣で手を合せるまねをしてるんだらう、實際困つたよ、僕のあの時分の氣象として、さう云ふ板目になると、どうしても嫌と云ふ事が出来なかつたのだ、夫れに心の内では、直き分る事だらうと思つて。まあ口丈の關係を承知したと

(255)

云ふ譯さアハ、其、實少々嬉しかつたかも知れないね、アハ、

『人を馬鹿にしていますよホ、』

『併し、そら、其翌晚いつもの通り巴で飲んでると、小米の奴がやつて来て、皆の前で切つても切れない縁だなんて熱を吹かれたから、困つたね、汗がびつしより、穴でもあつたら真正に這入りたかつたね、あの時はお松さんなんかに面目なかつたね……』

『さうですともさ、あの時位腹の立つた事は有りやしませんでした、貴客の堅いのは通り者に成つてたんでせう、夫れで……そう、あの晩でしたね、貴客が女を知つてるの知らないのつて皆なで揶揄つてたのは……』

『そうさ其時さ』

『へい、小米さんがツカ、入つて来て、貴方の傍に坐り込んでさ、『紫藤さんには私と云ふ者が附いてるんですよ、皆さん妬かなくつても宜う御座んすよ』てんから

(257)

之だもの驚きましたわね、併し皆んなが、まさかと思つたから、冗談だのなんのつて云ふと、小米さんがムキに成つて怒り出して、賣言葉に買言葉で、私と小米さんと喧嘩に成つたんですよ、それ其時、論より證據だつて貴客に聞いて見ると、唯眞赤な顔して、もぢくし乍らとう、遁げ出したんでせう、ほんとに腹が立つて、まさか貴客に限つて……而かも他の藝者なら兎も角、あんな悪まれ者の、御轉婆藝者のやくざ女の、御茶びーに、まさか貴客とも云はれる人がと思つて云ひ張つたのが、何だか實際らしいんですよ、まあ呆れましたね、男つて者はあんなに意地汚たない、意氣地ない者だかと、ほんとに其時は呆れましたよオホ、

『冗談じゃないせアハ、』

『して夫れから貴客は駒の路でせう、だから皆んなが矢張り眞實だつたて呆れて居たのですよ、併し二ヶ月目に小米さんは三味線ひきの榮藏と道行をきめた跡で、杉田さんと小奴さんから、實はかう、だつたて、しつかり筋書を聞いて、オヤ、

と又た皆なが呆れましたのよ、オホ、〜」

「さうか、そんなら知つて、僕をさんざ喋べらせたのか……」

「さうですともさ、其位當然でさねオホ、〜」

「何だ詰らない、人を馬鹿にしてる、舌の硬ばる程喋らせて、冗談じゃない、罰に飲んだり、ついだりだ、オットどつこい」

「オヤ御銚子がないよ、之れお玉ヤ」

(四)

「而して小米はどうしたらう」

「オヤ矢張り未練が残つてると見えますね、ホ、〜御氣の毒ですけれども、彼の人位浮氣な質はありませんよ。物の半年もた〜ない内に、榮藏が嫌になつて遁げて歸つてさ、夫れから壯士芝居の下廻り、寄席の前座、肴屋の吉公、床屋の芳さん、其他色々大事な人が一と月位に變つて行くんですもの。とう〜今では吉原の幫間

の甚孝とかの妻君に成つてゐるんですとさ。併しあ〜云ふ人だから、思召が有るなら何所かで呼んで御覽なさいなオホ、〜」

「オイ〜大概に冷かすが宜いぞ、アハ〜他の奴等はどうかだね」

「さうですね、小奴さんは米屋町の人に出されたし、太さんは檜物町に住み換へましたし、金八さんは田舎に行つたし……」

「小勝はどうした」

「あ〜小勝さんですか、さう〜貴客の知つて入らつしやるので未だ残つてゐるのは、小勝さん丈ですよ」

「ウム小勝はまだ居るツ？」

ほんのりと酔の廻りし紫藤の顔は俄に光を増した。グイと一二飲み干して、シガ―を點火やうとする手元も少々微動ふ様に見える。されど、お松は氣附かぬらしく、

「ほんとにあの人は感心で御座いますよ、今時藝者の模範ですね、御座敷より他は

(250)

之れッばしだつて勤めないんですから、夫りや堅いもんですよ、それ何時か貴方の打叩つた安川大佐、彼方が大層執心で、色々手を廻して御茶屋の方から母親迄承知させて、進退ならない様になつたもんだから一年程静岡に逃げて居たんですよ、其内安川さんも死去たし、母親さんから呼び戻して歸つたんですが、夫れこそ眞の一度でも客を取つた事ないんですから、ほんとに感心ですよ、今時の藝者の中じゃ、何とか……ほら泥中の……蓮とかでせうよ、ホ、〜』

『ウムさうだね』

と云ひつゝも、紫藤の眉はビリ、と動きぬ。

『呼んで御遣んなさいよ、ね、紫藤さん、どんなに喜ぶでせう、それに男嫌ひと云ふ評判取つたもんだから、御手輕主義の一件主義の御方は、駄目でせう、夫れで御茶屋や待合の方でもつい懸けないやうな譯で、今では餘まり賣れないんですよ、ね、早く呼んで御遣んなさいよ』

『ウム宜からう』

静に漏す紫藤の返事を小耳に挟むとすぐ、お松はいそ〜出て行つた、電話を懸ける爲めだらう、紫藤はほつと溜息を吐いたが、二三盃手酌で引かけながら、内懷袋より取り出したる一枚の寫眞、見る間もなく、お松の足音に、ハツと上氣したらしく急いで藏くして了まつた。

吁小勝！ 其名は影の如く紫藤の念頭に付き纏つて居たのである。其寫眞は鶏の卵の如く常に懷中に温められつゝ有つたのである、されど六年の長年月、最早他人の掌中の花と成て居る事と豫期して來たのが、未だ霜にも枯れぬ一輪の菊と残つて居やうとは、紫藤の心はどんなであらう。

紫藤は名を正雄と云つて、士官學校優等の卒業生で、日清戦争の頃は中尉であつた。併し磊落不羈の氣象と鬱勃たる奇才は凡骨の忌む所と成つて、戦争の時は留守勤務に廻されたが、夫は充分責任を盡したのである。唯彼の憤慨したのは戦後軍人

(251)

の跋扈で「何だ之から真正の戦争が始まるのに、豚追ひ位に威張るやうじや到底も駄目だ」と云ふのが口癖であつた、夫れから軍人には望を絶つて所謂當世の志士、浪人の間に交際を求めて、家が地方の豪家であるに任せて、随分豪華を遣つた、元より軍職を退く決心だから、遠慮會釋する所がない、雄心燃ゆるが如き壯漢を集めて飲み廻り暴れ廻つたのである、お松を知つたのも此時である、編笠紋附時代も此時である、其無邪氣な愛らしい風姿と、男らしい氣象が花柳界の花と喧傳されたのも此時代であつた。浮世の風には小枝一つ折られないと誓つたお松の心も動かしたのであつた、併し品行は案外方正であつた事は、お松の云ふ通りで、女と關係した事など無いらしい、愈々御望み通り退官が叶つて、いざや燕山楚水、鞅鞅の原頭を探検して他日の地盤を作らうと思つた時に、後髪を引かるゝ者が有つた、夫は云ふ迄もなく小勝である。彼れが始めて料理屋の門をくゞつた日より、人知れぬ思ひを小勝に寄せて居たのだが、打出す機會もなく、思はぬ小米事件などに妨げられて、空

しく彷徨ふて居る中に、遽に出發期が迫り、萬里の雄心に戀の秘密を包んで異域の土を踏んだのである。爾來六星霜、僅かに一葉の半身像に其衷情を慰めて居たのが、今日只今、面のあたり再び其人を見やうとは！ 引かば靡かん女郎花の數々を見向きもせなんだも其人の爲め、舊知のお松を訪ふて過ぎし豪華の夢を話すも、其人の消息を聞かん爲ではなからうか！

『今晚は、こちらですの』

しとやかに襖を開けて入り來りしは、夫れ其人！ 満身の熱血は紫藤が頭腦に迸つた。

(五)

軽く三ツ指の挨拶宜しく、紫藤と斜向はすかひに坐れる小勝は夜風に吹かれて、少しく上氣せしと見えて、眼瞼より頬にかけて淡紅を帯びて居る、中脊ではあるが、すらりとした方、地味な小紋の紋附、引つけに結ふた銀杏返、目立たぬ程の薄化粧、萬事



(274)

が清楚して居るのと、舉姿の静肅なので、藝者と云ふのが不適當であるから廿四五と見る人もあらうが未だ三にしか成らないのだ、柔和い嬌音が其唇から漏れて

『ほんとに御久しいじやありませんか……私はどう遊ばしたかと思つて……』

跡は云ひ得ぬのであらうか、袖を探つて取り出した桃色の綾織手巾。

紫藤は元より胸の鼓動の収まるべくもない、『ウム』と云つたのも、口の内で、暫くは相對して無言の體であつたが、何を思つたか勢よく一杯飲み乾して呵々と笑ひながら、『ハイ』と盃を指し出した、小勝も釣り込まれて、オホ、〜と笑ひながら盃を受けて、

『お松さんが電話で、貴客が入らしつたて云ふんですけれども、嘘と思ひましたよ、併し是非ツて云ふんですから、伺つて、ほんとに驚きましたよ』

『ハア〜ハ、未だ死な〜かつたよ』

『オホ、〜私もまだ……』

云ひつゝ何とせしぞ、其愛らしき二重瞼に、露か雫か一點の光が映つた。

紫藤が豪華を競ひし頃は、綻びそめし稚兒櫻、今は葉末に残んの色香と云ふではないが、どうやら浮世の雨に艱むだ風情が有るので、紫藤は堪へられぬ思ひである、其豊頬の衰へた様子を、無限の情を込めてじつと見て居たが、何とか紛らさうと云ふ風に、

『お松さんはどうしたね』

『あちらの御座敷ですが、直き参りますよ、貴客が入らしつてるんですもの、併し先時分のように貴客に付き切りと云ふ譯に参りませんよ、オホ、〜』  
と淋しく笑つた。

『夫りや當然じゃないか、斯うして一軒やつてるんだから……』

『それですけれど、今では歴然とした御亭主があるんですから……オホ、〜』

『さうかお松に亭主が出来たのか、併し僕と何も怪しかつたんでもないから、關ま

(275)

ふまいじゃないか』

『貴様は何でも無かつたんでせうが、お松さんは大邊でしたんだから……』

『何がさ』

『何ッて貴客に……オホ、……』

小勝の顔は紅を潮して來た、盃を取つて紫藤に返した、紫藤も思ひ當る節々が有るのだから、愈々赤くなつた、而も此人から如斯な言を聞くかと思ふと胸の鼓動が益々烈しくなるのである、併し六年間胸底に秘めた意中を吐露すには、却つてかう云ふ機會が宜いとも考へた、されど何として、酒の力を借らずには？

前にある麥酒のコップを取つて、一息に呑み干して、『オ……御酒を……』

『其れに！ そんな大きいので毒ですよ』

『いや關はないからついで呉れ玉へ』

波々受けて、之れも飲み盡して、

『もう一杯！』

『御止しなさいよ、ほんとに毒ですから紫藤さん』

小勝は呆れたと云ふより、寧ろ心配そうに紫藤の顔を眺めながら、

『どうかなすつたんですか、紫藤さん、急にそんな事なすつてさ』

『否、心配しなくつてもよいから呉れ玉へ』

今度は半分計り飲んで下に置き乍ら、

『小勝さん、……僕は極く眞面目な……心の底を打ち明けるのだが……聞いて呉れるかね』

眞正面に小勝の顔を見詰た。『へい』と云ひながら小勝は、紫藤と視線が衝突したので、下を向いて膝の上の手巾を捻つて居る、其桃色よりも顔を紅くして、紫藤の顔は今や火のようである、其唇は微動した。

## (六)

紫藤は残なく云ひ盡したのである、口を切る迄の體度とは丸で別の人のやうに、判然した調子で、抑も巴で始めて小勝を見た時の感想から、今日か明日かと云ひ出す機會の無かつた事や、思はぬ小米の係り合で、愈々引込思案になつてる中、遽に外國に立つやうに成つた事迄、秩序よく話した、而して隠から彼の寫眞を取出して、『之れ見て呉れ、小勝さん、先に君から貰らつた寫眞だが、六年の間どんな淋しい山奥に行く時でも、どんな繁華な都に出る時でも、母から貰らつた守袋と一緒に、夫りやもう片時でも肌身を離した事はないのだから、之れ丈でも僕の心が分るだらう』と云つてコップを揚げて一口咽を濕ほした、小勝は寫眞を膝にのせて見たまゝ無言である、紫藤は猶も、而かも前よりは一層確然と、聲に強みを持つて、『併し、ね、小勝さん、僕がこんな事を云つて、前の事から繰り返したりなんぞすると、君は可怪しく考へるかも知れないが、決して僕は、そんな氣で云ふんじや無

いからね、小勝さん、君が今の藝者に二人とない意氣地を立し通ふして居る事も聞いているかしたら、夫れを打破さうなんて、僕も男だ、女房にでも成つて呉れと、頼むなら兎も角、今の腐つた奴等のやうに、あと先關まはず……えい云ふのも汚らしい、それに僕は蠢蟻共と仕事が異ふんだから、到底も女房など持てる身體じやないし、唯僕は……たゞ自分で思つて居た丈の事を不殘小勝さんに話して、それで小勝さんがあゝそうだつたかと思つて呉れれば、夫れで澤山だから、ね、小勝さん、どうぞ堪違へしないやうに頼むよ、アハ、もう宜い、サア一つ愉快に飲まう』

六年の鬱屈を一時に開いたので、如何にも心が冴えたと云ふ風にコップを取つたのである。火の如く紅かつた顔色も今は醒めて、唯一種の輝きを以て居る、涼しき目、結べる唇、凜々しい男らしい容貌は、一段と認め得られる。

伏目勝に聞いて居た小勝は、未だ頭を上げやうともしない、併し細くふるうた聲で、

「あ……貴客は、また外國に入らつしやるんですか……」  
「ウム又」

紫藤は判然答へた。見る／＼一滴、二滴、ラムプの光を帯びて、玉か雫か小勝の膝へと落ちた、睫毛を貫く露と共に其の愛らしき二重脛は斜に紫藤を見遣つたが、  
「あ……貴客は、お……御氣が濟んだのだから……こんな寫真なんか、入らないでせう」

其白き指は、膝の上の寫真にかゝつて、あはや、無殘に裂かれやうとした。

「そ、夫りやいかん」

と紫藤が驚き止むる手をじつと握りて、

「あ、あなたは、わ、私の心を……」

「えッ」

と紫藤は手を引いた。小勝は一膝にじり出でながら、紫藤の前のコップ酒を一呼吸

に飲み干して、

「あ、貴客は、あんまりですわ、……何とか、先の時分に仰しやつて被下れば、こ……こんなに永く……」

不覺涙を拭ふて、

「斯んな賤しい稼業はしても、わ、私は、武士の種ですから、自分でかうと思ふた事は、し……死んでも通ほします、併しあの頃はまだ子供ですし夫れにお松さんや小米さんに氣兼ねして……し……紫藤さん、わ、私の意氣地も、だ、誰れの爲めです……」  
「そ、夫りや眞實かッ」

紫藤は一膝すゝんを滑り出た、漸く収まらうとした胸の鼓動は再び怒濤狂瀾と躍り出した、小勝は、涙の中にも喜びを湛へて、

「斯んな嬉しいやうな、悲しいやうな事は、生れてから……」

じつと紫藤を見詰めた、雨を帯びたる海棠の夫れにもまして、紫藤の意馬は繋ぐ

べうもない。

『小勝ッ！』

と云ひさま其手を引かんとする一刹那、隔ての襖ツと開けて、入り来りしは女將のお松！

## (七)

『何も喫驚する事はありませんよ、皆なそこで聞いたんですから』

云ひつゝ入り来れるお松は、二人の前に坐を占めて、

『併しまあ能くも揃つて、古風な人達ですこと、オホ、く』

胸底の隠秘を漏らして、赤誠一點の他意なかりし二人も快裕なるお松の一言に、不覺の微笑をもらした、お松は猶も語をつぎ、

『紫藤さんも紫藤さんだが、小勝さんも小勝さん、ほんとに感心ですね！ 紫藤さんは遠方に入らしつたんだから、分らないけれど、小勝さんは始終往來してるのに、

夫りや私計りじやない誰にだつて、之から先でも感づかれた事が無いんですからまあ、能く辛抱が出来たもんですね、併し御縁でものは不思議なもんだわ、六年も南方で知らずに居たのが、今日此所で、而かも私の家だから、嬉しいわ、ね、紫藤さんオホ、く』

紫藤が笑ひながら、手持無沙汰に指した盃を受けて下に置いて、お松は、

『そりや、小勝さんの……オホ、く無理はありませんわ、彼の時分は私だつてね、小勝さん、オホ、く……あの時分だつたら、妬いたかも知りませんよ、オホ、く眞實にさ、併し今じや亭主もあるし大丈夫ですよ、小勝さんオホ、く』

小勝は今更赤面して、處女の如くはにかんだ、お松はかまはず、

『一體私はおせつかいな質ですから、人の御世話する事など大好きなんですよ、況して自分の好きな人や、感心した人なら、どうしても其人の思ふ通りにして上げたいんですよ、だから宜うござんすよ、私が媒に入りますから、ね、紫藤さん』

(274)

紫藤と小勝は思はず顔を見合せて、ほく笑んだ、お松は一口飲んで、紫藤に向ひ、「貴客は又外國に入らつしやるんですつて、御止しなさいよ、そんな所に行くのは貴客のやうな御方はどう頼んだつて樂に暮らされますよ、夫れに小勝さんも今じや自分の身體だし、抱への三人も有るんですから、御二人で世帯を御持ちなさいよ、御雛様のような、ね、紫藤さん、宜いでせう、小勝さん』

小勝は最早十年夢裏に慕ひし意中の人と、楽しき新生活を幻想しつゝあるのか、恥を含みし容姿にも、いそ／＼したる風情が見えて、其愛らしき眼は切に紫藤の舉動に注意して居る。

紫藤は、一たび晴れ渡りし心の月も、再び戀の浮雲に掩はれて、右想左思、黙然として考へに沈みけるが、功名富貴何か有らむ、人生最終の目的は愛の女神の外なしと、あはや！ 一劍萬里、滿腹經綸の大雄圖も、美人掌上の鎔鐘に銷し去らんとした。

(275)

折しも一聲、頭上に響く近衛三聯隊の消燈喇叭。

『ヤ、消燈喇叭！』

と紫藤は猛然として起つた。

翌日『ひで川』に二本の手紙と、二枚の寫真と届いた、夫れは紫藤の寫真で、お松と小勝に一枚宛贈つたのだ、手紙もお松と小勝にあてたので、

お松への手紙は、唯色々親切を謝して、昨夜の事は必ず秘密を守つて呉れる様にとの頼狀。

小勝への手紙は、左の如くであつた。

ゆふべは久々にて御めもじ致し、誠に嬉しく存じ候、わけて此身計りと思ひの外頼みなきこの身を、斯程まで御身の思ひ被下候こと、生々世々決して忘れ不申候此まゝ東京に御身と一緒に暮し度は山々に候へ共、御身が之まで意氣地を立て通

ふされしと同じやうに、男には又男の意氣地があり、此身が之迄の仕事を相やめ候時は男の意氣地が立ち不申、意氣地なき奴等の多い世の中に意氣地を立て、こそ眞の男と思はれ候まゝ、誠に身を切るよりつらく候へ共此儘御別れ申候、御身は女の事にもあり、花の盛りの何時迄もつくもに無之候へば、此身はなき者と諦らめ、行末御身の爲めになる方を見定めて御添ひ遂げ成るべく候、昨夜の話はお松さんにも頼み誰にも知られぬ様に致し候へば、御身も夢と思ひ被下度候、取り急ぎ用事迄何より〜御身體大切に成さるべく候。 あら〜しと

紫藤より

小勝さまへ

手紙を見るや否や、お松と小勝は車を飛ばせて、紫藤の旅宿を尋ねたが、もう遅かつた。

半歳たつた〜ぬ中に府下の新聞は争ふて斯う云ふ記事を載せた。

孤 劔 將 入 北 京

烽火何時舉 重過山海關  
 半天孤月暗 空照杞人顔

支那の或る地方に猛烈なる革命の義軍が起つて瞬く間に一省餘を席捲した、義軍一方の大將に眉目清秀の日本人が居つて、其軍は連戦連勝、鋭鋒當る可からずとの事だ、して其大將の姓は紫藤、名は正雄と云ふ由であると。(了)

水涸れや斜めにのぼる竹筏  
 木枯や黄華山頭素衣の人  
 暗淡の灘や鶴鶴とびもあへず  
 木枯に明翠閣の聳えけり  
 木枯の夜を炬火の野路かな  
 冬ごもり道士の髯の二寸哉  
 木の耳の羹すゝる寒さかな  
 小夜時雨若を煮る髯の道士哉

### 除夜懺悔

「今年も今晚きりになつたなア、何も無いが今夜は皆遠慮なしに飲むがよい。」と云つて先づ自分から杯を持つて飲み始めたは此家の主人で、三十六七の小肥りした八字髭の美くしい男である、輝き亘る目元には云はれぬ愛嬌があつて、而かも凛とした様子の何所かに見ゆるは、威あつて猛からすと云ふ風である、前には三四人の書生が窮屈さうに座つて、張臂の手は膝の上に置いて居るも、箸を取たら何の肴に突貫しようかと、眼は皆お膳の上に注いで居る、主人は愉快さうに笑を含んで、「さあ何故飲まんか、大變改まつたじやないか、酒も始終飲んではいかんが、飲む時は充分飲み、遊ぶ時は充分遊ぶさ、其代り又勉強する時は確り勉強せんといかん、男兒は元氣と節度が何より大事だ、今夜は皆年を一つ宛取るのだから、愉快に飲んで何か面白い話でも仕ようじやないか、これ、皆に御酌して」と傍に座せる給仕の女を顧み



た。書生は杯を取るもあり箸を握るもあり、追々御膳の攻撃を始めたのである。主人も二三杯飲みながら胴桐の火鉢を撫で廻して居たが、急に書生の方を見遣つて、『此年取の晩は、僕の爲めには紀元節とも云ふべき大切の日で、出世と云へば可笑しいがまあどうか人間並の者に成つたのも、此日の御蔭と云つてもよい位の記念を持って居る、今夜は特別に諸君にそれを御話して聞かそう』と云つて手に持った杯を一息に飲み干した。書生の視線は一時に主人の顔の上へと集つた。

『丁度十三年前の今夜だが、僕は其時私立學校を卒業した計りで、何一つ出来ない癖に、自分では餘程豪い者の様に自惚れて、殆んど眼中人なしと云ふ權幕であつた、四疊半の下宿屋樓上、内閣の方針がどうだとか、天下の形勢がどうだとか柄にもない大きいことを論じて、同氣相求むる連中と毎日のように集つては酒を飲んで怒鳴り散らし、果ては女郎買に飛び出すと云ふ始末、實に恥かしい次第であつたのだ。併し心の中では時々考へて見る事も有り、國からは色々の事を云て來るし、金には困る

し、大きな事を云つて居ても、前途の見込は雲煙渺茫、行末はどう仕様かと思ふ様な事も有つたが、又酒の一杯も呑むと例の豪傑に成つてうか／＼其日を送つて居たが、丁度その今夜だ、僕が先生とも保證人ともして居る人の所で、色々御馳走になつた上、歳暮として五圓貰つた、僕は愉快で堪らなかつたのである、久振りに金には有り付き、酒も飲んだし充分に酔ふて、氣焰萬丈意氣天を衝くと云ふ有様で門を出た、今夜こそよい年取が出来る、之れから車を驅つて例のお馴染の所に飛ばせ、相對して微吟小酌新年を迎へようなど、胸算用に心も足も浮き立ちながら大急ぎで車に乗つた、此日は雨降り上りで晴れては居たが、途はまだ凍らないから丸るで飴箱を覆した様である、車は一二丁も駆けたと思ふと、バツタリ止つて牛の歩くよりも遅くなつた、肌を切る様な北風はビュー／＼云て吹て居る、僕は寒いのと迂遠しいので、勃然として不平が起つて來た、『おい車屋早く遣らんか。』と云つても唯ハイ／＼云ふ計りで、車は少しも進まない、癪に障つて堪らないから怒鳴り附けると、呼吸を切

らして居る車屋はとぎれとぎれ、「この通りの道ですから、ど、どうも……。」と詫る聲が皺枯れて居る、ハテナと氣を附けて見ると、年寄も年寄、もう腰が曲て居る位、一生懸命になつて引いては居るが、泥濘がひどいので、せい〜云ふ計り車はちつとも動かない、僕は其時、ヤーしまつた事をした、酔ふて居るのと直段の安いので飛び乗つたのが、老耄車夫であつたと悔んで見たが仕方ない、酒は醒めてくる、風は寒いし、もう下り様かと思たが、まあ〜と考へて、「車屋増してやるから急げ」と云つた、そこで車夫は渾身の力を込めて曳き出さうとした一刹那、溝の様に掘れて居る泥濘の中に、右の車輪がガタンと陥て、車は老耄諸共横倒しに顛倒した。危険く僕は飛び居りたが、片足は泥まぶれになつた、思はぬ災難に酒は全く醒めたが、煮え返る程腹が立つて、かまはず歩るき掛けたけれど、年寄の事でもあるし、少しは可憐さうと思つて、五錢もやらうと老翁の傍に近いた、泥溝鼠の如き老車夫は、車を起して居たが僕のソラと出したお錢を見て、其瘦せ細つた黒く皺枯た手を摩りなが

ら、ダ、ダツ旦那様、ド……どうぞ助けると思つて乗つて遣つて下さいまし……。」と二三度頭を下げ乍ら聲涙共に咽んで、「ワ、私が歸らなければ、家の奴はト、年も取れません、子供が三人居りますが今夜の稼ぎがよくないと、正月のモ餅も食はせられませんド、何卒助けると思つて廓まで乗つてやつて下さいまし」とふり落る涙のハラ〜と、凹んだ眼よりこけ果てた頬を傳ふのである。僕は惻然として何か物に襲はれた様に感じた拍子に、颯と吹き下した北風が、腸の底迄凍り切るかと思ふ程ゾツとした。此瞬間！ 此動機！ 忽ち僕は國の老親の事や、自分の行や、あらゆる事を回想して、悔悟の念が油然として湧いて來た、かうなると良心の發動は驚くべきもので、邪念妄想は影もなく消えて、光風霽月皓々として輝いて居る。僕の頭上には天使が宿つたのである。フト老爺の方を見ると猶ヒョ〜腰を屈めて僕の許を乞ふて居た。僕は財布から彼の五圓札を出して、「オイ老爺、之を持って早く歸り、年越し子供に餅でも買つてやれ」驚愕に打たれし車夫は目をみはりながら、「エツド、ど

(284)

うして其様なお金が……」「いや構はず取れ僕は女郎買を止めて汝に遣る。」エツ夫では旦那が……へエ！」と言葉も出せず嬉し涙に咽びつ、覺えず手を合する様ちらりと見たまゝ、僕は韋駄天走りに下宿屋へ歸つたのである。

嗚呼其翌日の初日の出は、如何に煌々たる光を放つたのであらうか。諸君も察せらるゝであらう、夫れから僕は全く精神を入れ換へて、必死勉強に力めたのである。種々の困難不幸に出會つたが、何時も此精神を鍛へ直した寒風を思ひ起して、千挫屈せず百折撓まずで凌いだから、僕の様な鈍才でも漸く今日の地位になれた次第さ。ハツ、ハツ、詰らぬ懺悔の長話、さぞ退屈したらう、サア……飲むべし……、今日は大に飲むべし』

説き了つて主人の顔は愈々輝きわたつて、氣高く懐かしき人品は不知……人を敬服せしむるの趣が有つた、謹聽して居た書生共は、ホツと漏した吐息の中に、覺えず其話が心魂に徹して、精神の汚點を洗ひ出した様子が見ゆるのである。斯く樂し

く睦しく殘年を送つて新年を迎へた其人は、現時屈指の次官で有つて、今度の交迭には是非とも大臣と目せらる人であるさうな。

## 武夷山卽事

茶の花や赤土山の崖くづれ  
 茶の花に交りてなびく尾花哉  
 茶の花や岩間くの小砂利畑  
 とんで散る萬仞崖頭の紅葉哉

(285)

片  
鱗

次鮑笙之韻、贈上洋中學堂諸子

撫育俊英排俗流	高風喜見嘯清秋
讀書獨開新眉目	講學更傳古骨頭
一蹶好成隗始業	三遷何抱杞人憂
重擔繫在諸君背	四億生民四百州
弔明十三陵	
當年帝業尙堪徵	石馬石人護古陵
麥浪亦看成起踏	浮雲還遂白雲騰

片  
鱗  
終  
り

大正八年四月十八日印刷  
大正八年四月廿二日發行

定價金壹圓參拾錢

著者 伊 東 知 也

發行者 東京市小石川區戶崎町十三番地  
中 山 清 二 朗

印刷者 東京市小石川區四江戶川町廿一番地  
藤 澤 松 次 郎

印刷所 東京市小石川區四江戶川町廿一番地  
東京印刷製本株式會社

版 權  
所 有

東京市小石川區戶崎町十三番地

電話小石川三三四八番  
振替東京三七五八番

龍 川 社

發行所

海軍兵志願者必携

# 海上生活

四六版百四十頁  
口繪寫真版  
定價四十五錢  
郵税金四錢

本書は海國の起源より説起し海兵團并に軍艦生活其他海軍々人として必要なる一切が悉く網羅されてあります。訪問の所謂報告記事同様の乾燥無味なるものとは異り、海上生活の趣味と知識との兩方面を兼ねたる良書で名譽ある海軍々人を志望せらるる諸君の是非とも一讀しなければならぬ有益なる著書であります。

入營者の伴侶

# 軍隊生活

四六版總クローズ  
口繪寫真入  
定價金四十五錢  
郵税金四錢

吾々が社會に生存する上に於て最も密接な關係を有する軍隊生活を知ること何人にも必要な事でありませう。本書は本會長故恒吉少將監修の下に本會編輯局佐官編輯の任に當り軍隊生活について詳細正確に錄されてあります。軍隊の内部を知るには此上ない良書で軍隊生活に入る青年諸子は勿論一般世間の人にも一讀の價値があります。

大日本帝國壯丁教育會 東京小石川三十町

電話小石川二三八四番・東京番九三三九番

387  
4

終